

フッサールの相互主観性理論が意図するもの

―フィנקによる『デカルト的省察』書き換えの試みを通して―

北野 孝志

通常、フッサールの相互主観性の理論を検討する際、我々が念頭に置くのは『デカルト的省察』の「第五省察」であろう。しかし、その「第五省察」の相互主観性の理論は厳しい批判に晒されている。というのは、フッサールの相互主観性理論では、特に彼の自己移入理論では他者理解を可能にしないと考えられているからである。しかし、そのような批判がフッサールの相互主観性理論における意図に即した形で為されているかは疑問である。

さらに、ここで重要なことは、フッサール自身が『デカルト的省察』フランス語版刊行後の一九三〇年代前半を通して、そのドイツ語版のために書き換えの試みをしているということである。また、当時彼の助手としてフライブルグにいたオイゲン・フィנקにも書き換えの依頼をしていた。そして、そのフィנקの書き換えの試みが近年『第六デカルト的省察』と題して刊行された著作の第二巻に収録されている。ここでは『デカルト的省察』の書き換えを行おうとしていたフィנקの草稿、具体的には『第六デカルト的省察』第二巻を考察し、相互主観性理論が意図していたものとそこでの問題点を浮き彫りにしたい。

1. 『デカルト的省察』書き換えの意味

フツサルが一九二九年二月に行つたソルボンヌでの講演を基に、それに加筆したものを『デカルト的省察』と題し、一九三二年にそのフランス語訳を出版したことはよく知られている。その原稿は、フツサルが既に一九二九年の五月にフランスへ送つたものであり、ドイツ語版としてもそれと同時に出版される予定であつた (vgl. BW III, S. 246)。しかし、フツサルは幾つかの理由から大幅な書き換えを考へるようになり、一九二九年の九月以来フツサルはドイツ語版のための書き換えに取り組んでいる (vgl. a. a. O., S. 255)。そして、フツサルはその書き換えの試みを、その当時助手であつたフィンクに委ねると共に、その後フツサル自身が仕上げをする形で出版しようと考えていた (vgl. a. a. O., S. 283)。それ故、フィンクによる書き換えの試みは『デカルト的省察』の理解を深める上で重要なのである。

また、フツサルは『デカルト的省察』における「第五省察」の重要性を強く感じており、それによつて「第一省察」から「第四省察」の、さらには省察全体の真なる理解が可能になると考えている。¹⁾それ故、フツサルに対する批判を吟味する上では、この書き換えの試みによりそもそも「第五省察」において何が意図されていたかを知ることが重要になるのである。

2. フィンクによる『デカルト的省察』書き換えの試み

前述したように、フィンクはフツサルの依頼により、『デカルト的省察』の書き換えの構想をたてている。しかし、フィンクは相互主観性に関する考察である「第五省察」については部分的にしか書き換えを行つていない。つまり、根本的にはフツサルの表現を生かした形で書き換えが為されているのである。しか

しだからこそ、この書き換えがフッサールの相互主観性理論の意図するもの、あるいはその問題点を明らかにする上で重要であるように思われる。では、実際にフインクの書き換えの試みをみていこう。

a. フインクはまず「第五省察」の最初の節である第42節（I. S. 121-122）を部分的に書き換える。この節は、新しく他我経験の問題を取り上げることの意義を述べ、その後の省察の歩みを方向づける意味で重要である。しかし、刊行されたものにおいては、「独我論という意義に対して他我経験の問題を提示すること」という表題が示す通り、現象学に絶えず付きまとう独我論という非難を退けるためといった消極的な理由でしか他我経験の問題の意義が述べられていない。そこで、フインクはこの問題を積極的に取り上げる理由を述べるために書き換えたのである。では、他我経験の問題、ないしは相互主観性の問題はどのようにして積極的な意義を持つのであろうか。

フインクはこれまでの省察の歩みを振り返ることにより、相互主観性の問題が必然的に現れることを示そうとする。「第四省察」までで為されてきた自我論的な超越論的解釈は、「超越論的主観性の完全な射程距離」^{ウツェルラウフ}（VI. CM 2, S. 244）を問題としてきた。それも、超越論的主観性の事実を出発点とし、その超越論的主観性を形相的に記述する志向的構成的解釈の全体である還帰的現象学 *Regressive Phänomenologie* においてである。しかし、このような還帰的現象学の方法論においては必然的に限界があり、ここで問題となるのが「現象学的還元^{レダクション}の完全なる成果」^{Ergebnis}（*ebenda*）である。

そして、この還元によって得られる超越論的主観性は、それとしては明証的で必然的であるにも関わらず、未規定性 *Unbestimmtheit* という形において現れる。現象学に従事している我々にとつて、この未規定

性からは規定的なものとしてある固有の自我の超越論的実存が際立っており、超越論的主観性の全体が一般にあらかじめ与えられていないこと Unvorgegebenheit からは自我の志向的な生の構造や内在的時間のあらかじめ与えられているということ Vorgegebenheit が際立っている。それ故、超越論的自我論は還元によって、超越論的な規定的なものとして既に与えられているものの解釈として生じてきた。「しかし、現象学的還元の本質的意味には、その際立った自我の明瞭であるということが不明瞭な地平へと置き入れられ、その自我の規定性が超越論的生全体の原則的な未規定性へと置き入れられるということが含まれているのである」(a. a. O., S. 245)。それ故、超越論的主観性の完全な射程距離の問題として扱われうるのは、超越論的な存在連関を包括的に内に含んでいる不明瞭な地平^{ホリゾン}を露呈させることであり、それと共にそこにおいて可能な解釈を完遂するという意味で還元を完成させることであって、還元において与えられている自我論的な主観性を越えて仮説的(形而上学的に)拡大するという意味は含まれていないのである。

では、この不明瞭な地平としての未規定性はどのようにして露呈してくるのであるか。フイנקは、それが主観的存在の統一連関として、しかも構成する諸主観性、言い換えれば超越論的相互主観性の統一連関として可能であると言う。つまり、超越論的主観性の内部において、「そもそも超越論的な存在領域が自我を越えて伸び出るのであれば、この伸び出るということは超越論的相互主観性の形式においてのみ可能である」(a. a. O., S. 246)からである。そして、このようなことは現象学的な基礎的省察の根本意味の内存しており、「要求や形而上学的前提としてではなく、現象学的還元の内存的帰結」(ebenda)として見出されるのである。それ故、この超越論的相互主観性を証示することが還帰的現象学の課題となるのである。このように、フイנקは現象学的還元の完全な遂行により、必然的内在的帰結として超越論的相互主観性の間

題を見出したのである。

さらに、フイंकは超越論的相互主観性の問題に関する一つの誤解を指摘する。自然的態度において人間のなものとして、さらには人間的な相互主観性に順応しているものとして捉えられていた私は、現象学的還元により、私の根源的で超越論的な自我生へと還帰することになる。つまり、私に固有な人間の実存と共に、人間的な相互主観性も現象学に従事している私にとつては単なる現象となるのである。そして、このような還元は他者によつても遂行可能である。それ故、相互主観性はこの還元遂行の複数性によつて証示される。と考えられる傾向にある。しかし、このような還元遂行の複数性によつては超越論的な相互主観性は証示されないとフイंकは言う。現象学的な還元遂行の複数性は、単に自我論の複数性しか示していないのである。それによつてはお互いの間で成り立っている内在的連関は示しえないのである。しかし、このような還元遂行の複数性も、根本的な意義としての超越論的相互主観性を暗示しており、超越論的態度においてあらかじめ既に相互主観性が証示されている時に初めて重要な意義を持つものとなるのである。

では、超越論的相互主観性はどのように証示されるのであろうか。自我論的領域においては、他者や相互主観性の問題は、差し当たり現象としてある他者と相互主観性の自我論的な構成の問題として現れてくる。しかし、他者の経験を志向的に開明することは、自我論的構成的な原則として、すなわち人間的他者という対象構成の問題として具体的に展開され実行されるべきではなく、超越論的相互主観性の露呈という根本的な機能において為されるものである。つまり、自己移入の構成的な理論を完全に分析しても問題は解決しないのである。このように、自己移入の構成的理論は、超越論的相互主観性の理論において中心的な役割を果たすものではなく、派生的な問題として考えられているのである。

そして、フイंकは「第五省察」を以下のように性格づける。1. 自己移入の超越論的理論の基礎、2. 自我論的還元をその内に含意されている相互主観的還元へと完成すること、3. 構成的主観性の世界化の超越論的理論（他者の構成が同時に他の人間たちの間にいる一人の人間としての自分自身の構成を意味している）、4. 世界内在的な客観性への超越論的基礎理論（客観性はあらゆる人に対する存在という現象学的意味を持つ）（vgl. a. a. O., S. 249-250）。このように、フイंकが自我論的考察に内在する超越論的他者を証示することを重視しており、超越論的自我論が必然的に超越論的な意味での相互主観性の問題の開明へと進むことを積極的に示そうとしていることは明らかであろう。

b. 次に、フイंकは次の節（第43節「他我経験の構成理論に対する超越論的の手引きとしての他者のノエマ的・存在的な与えられ方」）の途中に、「内世界的に経験している主観に対する存在としての世界の現象的な存在意味」（a. a. O., S. 250）を問題にした文章を挿入する。これは、差し当たり私に与えられ経験される他者が、世界内に存在している一方で、世界に対する主観でもあるということ、したがって私は還元によって得られた超越論的領域において、他者を共に含むような世界を、それも経験の意味に従えば誰にとっても現実に存在しているような相互主観的世界を経験しているということを示した後、そのことと超越論的意味での相互主観性との関係を示すために付け加えられたのである。

自然的態度における世界は、差し当たり誰にとつても現実存在、すなわち誰にとつても近づきうる経験可能性という意味を持つている。しかし、それによつてはまだ超越論的相互主観性は示されない。そして、還元により世界は現象における世界として、すなわち超越論的自我的経験相関項として与えられることにな

る。つまり、自我論的な考察において問題となるのは、誰にとつても、すなわち内世界的に存在する全ての経験主観にとつての存在としての世界の現象的な存在意味の構成であつて、超越論的な誰にとつても存在という超越論的な存在意味、したがつて超越論的相互主観性を示すことにはならないのである。

このように、フイנקは超越論的相互主観性を証示するためには超越論的な自我論の内部からそれを越え出るような考察が必要であると考へているのである。

c. フイנקは、さらに「他者の超越論的な他者への還元」(a. a. o. S. 251)という新しい節を第48節 (I. S. 135-136)と第49節 (I. S. 137-138)との間に作る。第48節は「第一次的超越に対してより高次の超越としての客観的世界という超越」という表題が付されており、第49節は「他者経験の志向的解釈の道程をあらかじめ描くこと」である。では、ここで新しい節を挿入することにはどのような意図があるのであろうか。

上述したように、自己に固有なものとしての自我論的な構成は、世界の完全な客観性を示すことにはならず、それぞれの主観に固有の「世界」を構成できるに過ぎない。ここで必要になるのは、超越論的に共に構成し、共に実存しているような他者を想定する超越論的な権利である。しかし、部分的にはあるが、「客観的世界」の妥当性の根源となる構成する自我としての私を獲得するような原初的還元においては、「全て」の「他我」を方法的に排除するという原則 (IV. CM 2, S. 253) が成り立っており、他者は現象としてしか与えられないことになる。ここに一つの困難ないしは逆説が存している。つまり、我々は自我論的領域において、客観的世界を構成しうる経験の妥当性を持つているにも関わらず、それは我々自身からではなく、現象として与えられている他者を指示することによつてであり、換言すれば、他者への指示は世界現象にそ

の由来を持つているにも関わらず、その世界現象の客観的意味は他者への指示によって初めて得られるのである。

フイנקは、このような困難もしくは逆説が、次のことを想定することによって解消されると言う。その想定とは、現象的他者によって既に超越論的他者が暗示されていることであり、現象的他者の経験の伝達が構成しつつ意味形成することの超越論的な伝達に基づいており、単に世界化された人間統覚に覆い隠されているに過ぎないということである。しかし、このような想定は想定である限りは証示されたことを意味しておらず、超越論的な意味での証示を必要とする。そして、この課題を果たすのが自己移入の超越論的な理論であると言う。そこには、世界内在的に出会われている現象的他者を、その基礎となつてゐる超越論的な共同主観性へと還元するということが含まれている。その際、差し当たりその超越論的な由来については不明瞭な他者の意味要素が自我の具体化ということの一部を成しているという事実が、自我論的還元の完成として現れる他者の還元ということに対する動機づけを与えているのである。

ここで注目に値するのは、フイנקがこの〈他者の還元 *Reduktion des Anderen*〉の意味が二義的であると言つてゐることである。そして、これは「他者の」の「の」という格助詞(ドイツ語で言うところの *des Anderen* という風格)が意味するものの二義性である。つまり、この「の」は主語を表す意味と目的語を表す意味を持つてゐるのである。前者が意味するものは、他者についてその他者が還元を行つており、私も自己移入によつて後からそれを追遂行できると知つてゐる限りでその他者を超越論的共同主観として承認するということであり、したがつて還元の数性であり、既に示されたように超越論的な意味においては重要ではない。これに対し、目的語的な意味合いを持つ風格の意味するものは、他者をその人間的な世界形態か

ら超越論的主観性へと還元することであり、それによって私が超越論的な態度に留まりつつ自我論的な解釈を踏み越えるということなのである。

これにより、自己移入の意味にも変化が現れる。自然的態度においては、そもそも人間同士の経験連関として機能している自己移入は、可逆性 *Reversibilität* という内的な性質を持っている。つまり、「単に私
が他者を経験し、その他者が私を経験しているだけなのではなく、その他者を私を経験している（より精確に言えば経験しうる）ものとして経験している時のみ、その他者を経験しているのである」(a. a. o., S. 254)。しかし、自我論的還元という形式における現象学的還元によって、その自己移入の可逆性は廃棄されるようにみえる。つまり、自己移入によつて、他者がそれも私を経験しているものとして与えられうるが、私
が他者の経験の対象である限りで、その他者にとっては私自身が現象となるのであり、他者は私を共に構成している超越論的自我としてではなく内世界的な人間として経験しているのである。

しかし、フイックはこのような還元についての考えが間違ひであると言う。つまり、自我論的還元によつては、自己移入の可逆性が廃棄されるのではなく、変様されるに過ぎないというのである。非可逆的にみえる還元は、自己移入において機能している志向性の一方の極に還元したに過ぎないのであつて、正しく理解されれば、自己移入の体験は二つの極へと還元されるのである。つまり、自己移入の自我論的な還元は、自己への還元と同時に他者への還元でもあり、他者を超越論的な共同主観として存在定立することなのである。それにより、自我論を内在的に踏み越えることになるのである。

そして、この自己移入の両極への還元 *Reduktion an beiden Enden* により、現象的他者の指示による超越論的共同体ないしは構成を行う相互主観性への逆示が可能となり、それによつて客観的世界の究極的な存在

根拠を獲得することができるのである。つまり、世界はあらゆる人にとつての現実存在という自然的経験意味だけでなく、〈超越論的な誰も *transzendentaler Jedermann*〉にとつての総合的意味像という構成的意味を持つているのである。

d. フィンクはさらに、自己移入の理論の解明からモナド相互の共同化、そして客観性の最初の形式としての相互主観的自然を示した後の節である第56節「相互モナド的な共同体の高次の段階の構成」(I, S. 156-159)においても、自己移入の超越論的理論の高次の段階の問題に関する考察を挿入している。

その際、フィンクは第56節の最初の段落をそのまま第55節に取り込み、他我経験の志向的解釈へと視線をもう一度移すという仕方です。さらに、そこでフィンクは、第62節の一部(I, S. 175-176)をそっくりそのまま移動させている。この部分においては、独我論という非難がこれまでの考察により論駁されるといふことを主張するための根拠が示されている。そして、現象学の最初の段階には欠けていたものとして、自己に固有なものの中で自己に固有でないものも存在意味を得ているということを理解するためになによりもまず、自己に固有なものを解釈することの必要性が述べられているのである。

これまでの他我経験の志向的な解釈は、超越論的な生の完全な射程距離を超越論的モナド共同体の射程距離として分析的に開示することであった。しかし、フィンクはそれにも関わらず、このような分析の性格づけには本質的な制限があると言う。というのは、我々が一貫して省察という形に留まっているような還帰的現象学においては、他者が超越論的に実存するものとして証示されるような体験を、根源的に構成している意味付与や総合的に志向的な体験へと統一しているような原時間化ウァンツァイティグングの層へと還元することは不可能であり、

自己移入の志向的意味の露呈は不完全にならざるをえないからである。それ故、そこで証示された超越論的相互主観性が制限された不完全なものか未解決のままに残されることになる。そして、その根本的な制限の原因は、他我経験の超越論的解釈において主題となつてゐるのが、モナド論的相互主観性の基礎問題である他我経験の原様態 *Urmodus* に過ぎないことにあるとされる。

ここにおいて、フイंकは他我経験における原様態とその志向的変様 *intentionale Advandlung* との関係について、自己移入の超越論的分析に即した形で言及してゐる。それによれば、我々が自己移入の超越論的分析を行う時に主題にしているのは、現在現前している他者の経験や最も一般的な生の構造において了解された他者の経験、そして正常な人間として共にいる他者の経験といった方法的抽象によつて得られるような他者経験の原様態に過ぎない (vgl. IV, CM 2, S. 259)。しかし、それぞれの経験において、自己移入の超越論的理論における高次の問題としての志向的変様が対応しているのであり、例えば非現前の他者であつたり、原様態としての故郷世界 *Heimwelt* を逸脱するものとしての異郷世界 *Fremdwelt* に属するような他者であつたり、さらには異常とされるような他者であつたりという具合である。そして、志向的変様が原様態から逸脱するという意味で既にその原様態を指示している一方で、原様態の方も志向的変様から逆に際立たされることによつてその意味を支えられているという相互的な指示連関が成立しているのである。それ故、原様態がはつきりとした形で現れるのは、その志向的変様に対してはつきりと際立っている時であり、我々が自己移入の原様態を理解しようとする際には、その志向的変様の問題を示唆することが必要となるのである。このように、志向的変様の問題は、還歸的現象学がはらんでいる制限を別の仕方で乗り越える手だてを与えてくれるものとして提出されてゐるのである。そして、それによりこれまで為されてきた原様態としての

他我經驗の超越論的分析も、より確実なものとして確証されることになるのである。

このように、フィンクはフッサールの相互主観性理論を、自我論における必然的な内在的帰結として積極的に浮かび上がらせる。その際、相互主観性理論において中心的なものとして考えられがちである自己移入の問題を周辺の問題とし、別の仕方では超越論的な相互主観性を証示しようとしているのである。

3. フッサールの相互主観性理論が意図するもの

前述したように、フィンクによる「第五省察」の書き換えはごく部分的にしか為されていない。それ故、フィンクの書き換えはフッサールの表現をよりよく理解するために為されたものであると言うことができよう。しかし、ここで問題は、刊行されたフッサールの『デカルト的省察』において、フィンクが意図したようなことを見出しうるかどうかである。

通常、フッサールの相互主観性理論が問題になるのは、自己移入についての議論であろう。確かに、自己移入の理論だけを問題にした場合、それが超越論的他者の構成を成功に導くものでないことは認められるべきであろう。しかし、あまり注目されていないことであるが、その後の論述をみれば、フィンクが書き換えにおいて試みたことが示されているように思われるのである。

フッサールは、自己移入により他者の構成を示した後で、客観的世界の構成を論じる段階に至り、他者の構成に際し自己の内で構成される物体と他者の内で構成される物体（身体）とがどのように一致するのかという謎を問題にする。「しかしながら、その謎は、二つの根源領域が既に区別されている時にはじめて生じ

るのである。けれども、そのような区別は既に他我経験が行われたことを前提しているような区別である。ここでは、時間的に先行している自己経験を根拠に、他我経験というような種類の経験が時間的にどのように発生してくるのかということが問題ではないのであるから、他我経験の内で現実に確認できる志向性を精確に解釈し、その志向性に本質的に含意されている他我経験の動機づけを立証することだけが、明らかに、(上述した謎に対して) 解決を与えることができる」(I, S. 150)。つまり、フッサールはあらかじめ自己が持っている根源領域と他我が持っている根源領域とを区別し、そこからこの二つの領域の融合をはかることによってではなく、むしろ超越論的主観性の射程距離の内で他我経験に関わっている志向性を解釈し、その志向性を動機づけているものを証示することによって、客観的世界を構成しようとしているのである。

その時、「我あり、という事実は、私にとって他なる他のモノダが存在するかどうか、そしていかなるモノダが私にとって他なるモノダであるかを予告している。したがって、私は他のモノダを発見することができるだけであり、私に対して存在すべき他のモノダを創造することはできない」(I, S. 168)。つまり、自我の存在領域が問題になっている時には、既に他者の存在が暗示されているのであり、我々はそれを顕在的に露呈させることしかできないのである。

逆に、私自身が世界を経験する自我として構成される条件には、私が他の自我と共同体を形成していること、すなわち相互主観性が構成されていることが挙げられる。「私自身に必然的に与えられる私の自我、すなわち絶対的な必然性において存在するものとして、私によって定立されうる唯一の自我は、自己と同じ他の自我と共同して存在している時のみ、つまり自己から方向づけられて与えられたモノダの共同体の構成員である時のみ、アプリアリに世界を経験する自我でありうる」(I, S. 166)。つまり、現象学的

還元によつて獲得された超越論的主観性は、その内に未規定性を含んでいるが故に、世界を経験する自我として具体化されるためには、その未規定性が開明される必要があるのであり、それが相互主観性の証示ということなのである。

それ故、自我によつて構成された世界は、その自我も属している相互主観的共同体が相関項として持つてゐる客観的世界である。「お互いに分離してゐるいくつかのモノド集合体、つまりお互いに共同体を形成してゐないようないくつかのモノド集合体が共存し、それ故それぞれのモノド集合体がそれぞれに固有の世界を経験すること、それ故に無限に分かれた二つの世界、すなわち二つの無限な空間と二つの無限な時間があるというようなことが（このようなことを言う私にとつても、またこれと同じことを言うことができる）私が想定する他のあらゆる人にとつても）考えうるであろうか。明らかに、そのようなことは考えられないことであり、全くの不合理である」（ebenda）。

しかし、そのことはモノド群の相互外在、すなわち文化などが違う共同体が存在することを否定するものではない。ただし、二つのモノドがそれぞれに持つ「二つの世界は、必然的にそれら二つの相互主観性の単なる環境世界であり、それら二つの相互主観性に唯一共通の客観的世界の単なる局面に過ぎない」（I, S. 166）。つまり、それぞれに世界が違つた形で意味づけられてゐるとしても、それらは唯一共通の客観的世界を既に含意している時のみ、それぞれの環境世界としての意味を持ちうるのである。そして、このような環境世界は、開かれてはゐるものの、事実的にしか、偶然的にしか開示されない地平を持つてゐる環境世界なのである。つまり、客観的世界とは、絶えず未規定なものとしての他者を内にはらみつゝ、それをも可能な地平として取り込むことによつて無限に求められる相互主観的な世界なのである。

このように、フッサール自身もフィンク同様、超越論的自我論の内部から必然的に越え出るような動機づけを見出すことによつて、自己移入とは違う仕方でも相互主観性を証示しようとしていることを示している。しかし、フッサールの自我論的考察における現象学的還元が、フィンクの指摘するように、超越論的自我への還元であると共に、人間的他者の超越論的他者への還元であるかどうかについては『デカルト的省察』において見出すことができない。それ故、この点についてはもう少し詳細な検討が必要である。

結論

このように、フィンクの書き換えの試みと関連づけて考察することにより、フッサールの相互主観性理論において意図されていたことが浮き彫りになってきたように思われる。それは、相互主観性の問題が超越論的主観性の射程距離を明らかにする上で必然的なものとして現れるということであり、それ故自我の規定そのものに他者の規定が既に含まれており、超越論的現象学によりその他者が発見されるということである。そしてその際、自己移入の超越論的理論は、超越論的他者の証示のための手引きの役目を果たしているのであり、直接に超越論的他者を証示するものではないのである。

しかし、このことに十分な確証を得るためには、もう少し詳細な研究が必要であろう。そしてそのためには、一九二九年の九月以来一九三四年に至るまで書き換えに取り組んでいたフッサール自身の草稿を吟味する必要がある。この点については、今後の課題としておきたい。

フッセリアーナからの引用は、本文中の括弧内に巻数（ローマ数字）、ページ数（アラビア数字）を示す。また、フ
インク『第六デカルト的省察』（Husserliana Dokumente II：E. Fink, IV. Cartesianische Meditationen 1-2,
Dordrecht/Boston/London 1988）、『フッサール書簡集』（Husserliana Dokumente III：E. Husserl, Briefwechsel I-X,
Dordrecht/Boston/London 1994）からの引用は、本文中の括弧内にそれぞれVI. CM, BWと略記し、フッセリアーナの場
合と同様に巻数、ページ数を示す。

（一） フッサールは、このような考えをゲッティンゲン時代の弟子であるインカルテンへの手紙の中で何度も述べてい
る。 Vgl. BW S. 280, 285, 287, 289.